日14－107

「TOKYO TRIBE」 ***

２０１４（平成２６）年８月３１日鎌倉＜ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ＞

監督・脚本：園子温
原作：井上三太「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ２」（祥伝社）
メラ（「ブクロＷＵ－ＲＯＮＧ」のヘッド）／鈴木亮平
出口亮（「ムサシノＳＡＲＵ」の中心人物）／ＹＯＵＮＧ ＤＡＩＳＳ
ユミ（ブクロに拉致される高い戦闘スキルを持つ謎の女）／清野菜名
第（「シンチュクＨＡＮＤＳ」のヘッド）／大東駿介
キム（一大抗争のトリガー）／石田卓也
のりちゃん（「ムサシノＳＡＲＵ」のアイドル的存在）／市川由衣
ブッパ（「ブクロＷＵ－ＲＯＮＧ」を裏で操る謎の帝王）／竹内力
エレンディア（ブッパの妻）／片美音
ＫＥＳＨＡ（ブッパの娘）／中川翔子
ンコイ（ブッパの恋子）／蓮実凛介
テラ（「ムサシノＳＡＲＵ」のヘッド）／佐藤隆太
ＭＣ ＳＨＯＷ（シンチュクシーテーの存在）／染谷将太
大司祭（ブッパを従わせる影の最大権力者）／でんでん
ジャグキン（大司祭が十一キャーに匿う謎人物で、高圧電線の殺し屋）／ベルナール・ウェッカ
亀吉（少年ボンスとともにやってくる通訳、大司教の護り）／遠藤
スカンク（メラの感ぼんちゃく）／松浦新
パシーム（海の親友）／石井勇気
ヨン／坂口栄斗
新米錦鯉／佐々木心音
ペテラン看官（ブクロ看察）／中野英雄
ブッパ（ブクロの用心棒）／風山雅美
レンコンシェフ（元「シブヤＳＡＲＵ」のメンバー）／井上三太
２０１４年・日本映画・１１６分
配給／引添

＜「ヘンタイ」も「地獄」もいいが、本作はどうも・・・＞

園子温監督は、韓国の本人・ギドク監督と並んで、私の大好きな監督。私が最初に惚れこんだのは、「ヘンタイで何が悪い！」「これが愛なのだ！」という開き直り（？）をテーマにした（？）「愛のむきだし」（０８年）（「シネマルーム２２ ２７６頁参照）、その後、「冷たい熱帯魚」（１０年）（「シネマルーム２６ １７２頁参照）、「恋の罰」（１１年）（「シネマルーム２８ １８０頁参照）、「ちゃんと伝える」（０９年）（「シネマルーム２３ ２２１頁参照）、「ヒミズ」（１２年）（「シネマルーム２８ ２１０頁参照）、「希望の国」（１２年）（「シネマルーム２９ ３３頁参照）と、さまざまな「方向」で独自の発信を続けた。彼本来の資質に属するのが、「地獄で何が悪い」（１３年）だった。

そこで問題点は、「ヤクザ対象」の高圧電線鉄塔のストーリーはメチャ面白かったし、スクリーンを真っ赤な血の海に染め上げた色彩効果もすばらしかった（「シネマルーム３１ ２４７頁参照」）、私はその評論で、「映画づくりへの情熱は「開田行進曲」以上！」と書いた（「シネマルーム３１ ２４８頁参照」）、園子温監督の映画づくりへの情熱は、本作でも感じると同じはずだ。しかし、そもそも「ＴＲＩＢＥ」って一体何？

本作は井上三太がファッション誌「Ｂｏｏｎ」に１９９７年～２００５年にわたって長期連載した「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ２」が原作らしいが、そもそもそれって一体何？「ヘンタイ」も「地獄」も良かったが、「冷たい熱帯魚」のでんでんの「恋の罰」の水野美紀、常盤貴子、高橋真唯の超迷惑な性の暴走先も良かった。しかし、「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ」はどうも・・・。

＜映画にはいろいろな「世界観」が・・・＞

私は、「スプロウテイル」（９６年）を何の事前情報もないまま偶然に映画館で鑑賞したが、その舞台となるＹＥＮ ＴＯＷＮとは一体ナニ？そもそもその時代では、「円万世界で一番強かった時代」を歪曲することはできないが、「スクロウテイル」はそもなＹＥＮ ＴＯＷＮを舞台とし、スクリーンとしては日本語、英語、中国語、そしてそれらを混ぜた言語が語られていた。まさに「無国籍映画」そのもので、世界観の重要さの有無は映画の世界観が疑問視されつづけ、すばらしい映画だった。また、ＣＨＡＲＡが好きだから迫足ながら声で歌った「Ｓｗａｌｌｏｗｔａｉｌ Ｂｕｔｔｅｒｆｌｙ ～あいのうた～」も当時大ヒット、私もカラオケで何回か挑戦したが、さすがにこれは常識外れなのが、私のレパートリーにはなりえないと思ったっ。また、張芸謀（チャン・イーモウ）監督の「女と銃と荒野の大地獄（ＡＷＯＭＡＮ，ＡＧＵＮ ＡＮＤ ＡＮＯＯＤＬＥ ＳＨＯＰ／三種拍風戯）」（０９年）が描いた無国籍世界観も面白かった（「シネマルーム２７ １０４頁参照」）。

さらに、ラース・フォン・トリアー監督が「アンチクライスト」（０９年）（「シネマルーム２６ ８３頁参照」）や「メランコリア」（１１年）（「シネマルーム２８ １６９頁参照）で見せた未法思想の世界観が、つくりにどうリアリされた。ちなみに、同監督の最新作「ニンフォマニアック」第１部、第２部は、「自らを色情狂と認めるな性少女を主人公とし、８つの章で綴られる、鈴的で清楚な「性」の挑戦」だそうだが、そこで示される世界観とは？

他方、北野武監督の「ＴＡＫＥＳＨＩ’Ｓ」（０５年）（「シネマルーム９」３９８頁参照）や、松本人志監督の「大日本人」（０７年）（「シネマルーム１５」４１０頁参照）の世界観は、私にはハリカしいだけだった。このような映画で観かける世界観はさまざまだが、さて井上三太の「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ ２」を原作として、園子温監督が本作で描く世界観（東京観）とは？

＜この世界観は、私にはどうも・・・＞

東京の中心は東京（新）周辺と新宿（新）周辺だが、「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ２」によれば、「族（トライブ）たちが命をかけて守っている、ブクロ（池袋）、ムサシノ（武蔵野）、シンチュク（新宿）、歌舞伎町（歌舞伎町）、シブヤ（渋谷）、練（練馬）、高円寺（高円寺）等々。」、実際には、はいかにも園子温監督らしい演出で、新米錦鯉（佐々木心音）の農薬ムード安全見せつけながら、それらの族が１つずつ紹介されていくので、興味のある人は それを自分の目でしっかりと。

ちなみに、キネマ旬報９月上旬号の「ＲＥＶＩＥＷ 鑑賞ガイド」への３人の映画評論家には「ＴＯＫＹＯ ＴＲＩＢＥ２」の採点は、１点、４点、３点と割れている。１点と評価し、「井口の中身いろいろ盛りそのようすがそのままに感が割れ、“族”の仮装大会の趣」と書いている北川れい子氏に私は同感。それぞれの「ＴＲＩＢＥ」どのファッション、それぞれのブライド、それぞれの高揚感は一応理解できるが、ハッキリ言ってみんなアホだなり、興田哲夫氏の三点は、どの知識は求めなかいにしても、「ＴＲＩＢＥ」の維持のためには それなりの知識と計算は必要はず。しかし、本作にみるようなつっぱりだけでは、「おらがまち」を守ることはできないのでは・・・？

＜ヒロインのインパクトもイマイチ・・・＞

「地獄でなぜ悪い」では、「ヒミズ」で園子温監督が見い出し、染谷将太と共にベネチア国際映画祭でマルチェロ・マストロヤンニ賞、最優秀新人俳優賞を受賞した二階堂ふみが大変な役を演じて、熱演していた。「ヒミズ」（２４頁参照）、「ヒミズ」の評論では、「二階堂ふみは第２の宮崎あおいだ！」と書いた。宮崎あおいは、ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」以降はふつうの女優になり下がってしまった感がある。それに同じように見た目、二階堂ふみがＮＨＫ大河ドラマ「黒田官兵衛」で演じている定姫役はあまりパッとしないが、さて今後の展開はフルに、園子温監督が本作で設定した「ヒロイン」、アクションができることを売りにした美少女、清野菜名。

最初は屋上での対決シーンでの女のアクションと役どころだ、ブッパ（竹内力）が支配するブッパクロンに連れてこられると、相棒のヨン（坂口栄斗）と共に、切れ味抜ムアクションが炸裂していく。もっとも、そこで注目されるのは本格的なアクションではなく、もっぱらパンチラ・アクションだ。そして、どう見てもかないうちないメラ（鈴木亮平）の前では、横たわったまま蹴ブラシャーを切り取られる寄の大胆なスタードを見せてくれるが、そのヒロイン・展開はいかにも中途半端とか言いようがない。後にこのスンミは、日本に来ぶをしてきた大司祭（でんでん）の娘・エリカ方をこっぱぐ判明するが、だから一体どうなっているのか？とにかく、本作全体のつくりが、北川れい子氏が言うとおり、「族の仮装大会」みたいなものだから、ブクロのメラＶＳムサシノＳＡＲＵの海（ＹＯＵＮＧ ＤＡＩＳ）との対立に基本的対立軸を設定しているものの、面白味が出ない。したがって、そもなストーリーの中で適度見せてくれるスンミのパンチ・キックも同様。私が大好きだった美人アクションな女・石橋美咲子がかつて見せてくれた本格的アクションは全然レベルが違うものだから、何度かが見えて、すべて他きてくることに・・・。

園子温監督は「紀子の食べ方」（０５年）で百瀬由里子、「愛のむきだし」で満島ひかり、「ヒミズ」で二階堂ふみ、といった原石の女優を開眼させただが、さて、本作でヒロインを演じた清野菜名の今後は？

＜終末完璧？竹内力は？活躍非は？＞

鈴木亮平は、私の友人でもあった電線鉄塔の「ふたたびｓｗｉｎｇ ｍｅ ａｇａｉｎ」（１０年）（「シネマルーム２５ ９２頁参照」）以降、正統派のタッコいい俳優として成長していくかと期待していたが、その後向と「変態役度」（１３年）でスフィーバー、今もなっかく、ＮＨＫ連続ドラマ「花子とアン」でいい役をやっているが、正統派俳優も目指せばもっと面白いのに、「変態役度」で味をしめたヘンタイ路線が好きなのか、本作では園子温監督の指示に従って（？）メラ役で変態ぶりをヒロトン発揮している。

他方、竹内力は「ナニコ魚飯屋」シリーズのイメージだけではダメなことはわかっているが、いくら何でも本作でのブッパのような役は「怪演」を通り越して、バカバカしくなってくるのでは・・・？映画はエンタメ、というのは当然だが、本作にみるようなブッパの演技はエンタメ？それとも単なる悪趣味？あるいは悪ノリ？

さらに、ブッパの息子コンイを演じる薄幸河内も、本来芸達者だから、こんなクダメな役もしっかり演じているが、スクリーンと比べ関連される「人間草異」の世界や、そこに絡みいれる薄幸河内の演技を見ていると、脇クンが惜しくなってくる。もちろん、これは彼ら３人の中の責任ではなく、すべて園子温監督の責任だが、いくら園子温監督作品への出演希望者が多いとはいえ、仲優としては作品を選ん方がいいのでは？それとは逆に、軽事熱帯から作品を選ぶことが確定していた石橋蓮司が最後の、ギリギリの５文字の評論制限以内の既任を晩に新った（？）のはやはり失敗。あくまで、安倍晋三総理の尊重である人事権の行使には無条件に従うと最初から表明した方がカッコよかったのでは・・・？

＜ラップミュージカルのめみは面白いが・・・＞

私は昔からミュージカル映画が大好き。それまでセリフを喋っていたのに、急に歌を歌いだすのは不自然だからミュージカルはキライという人もいるが、映画（ラピュタ）は基本的に何でもあり。したがって、楽しければ、そしてその音楽が素晴らしければ、それでＯＫ。 『サウンド・オブ・ミュージック』（６５年）は私がＳＴＯＰ！に解ける映画だし、『ウエストサイド物語』（６１年）も大好きなミュージカル映画だ。ちなみ、次の力ラジオ大好き人間である私は、演歌、歌謡曲、懐メロからニューミュージック、人気アイドルの曲まで何でもこだわり、ラップ音楽だけは苦手。それはあまり意人的な問題だが、園子温監督が本作で、いわばラップ版ミュージカルをしゃべくるスタイルに初挑戦したことは面白い。さて、その成否は？

その結みは多分成功しているはずだ。ラップ音楽はリズミカルなことと顔を隠せるのが特徴（？）だが、セリフをしゃべるよりは時間をロスしているが論点は、それ、パクって大音量で聞いているとなおさらだ。本作の物語の引き回し役になるのはＭＣ ＳＨＯＷ（染谷将太）だが、彼の声がちょっと低いこともあって聴き取りにくい場面もたびたびある。しかし、そもそものストーリー展開において、たとえば１シーンだけ登場した大司祭とその娘スンミとの関係に関係。ちなみに、大司祭が演じた任務的に後いはずの、ジャギキン（ベルナール・アック）と亀吉（遠藤）の２人が、さまざまに本のような最後のパトルの中でちゃっかり死んでしまう（？）など、本作では１人１人の物語の中で様々に絡まれ新鮮に解釈する必要もない。したがって、ＭＣ ＳＨＯＷによる物語の「進行表」が同種に見えなくても困ることはほとんどないはずだ。

むしろ、そのようなパターンを変えてみるよりも、ラップのリズミ一緒に足を踏み、リズムを取りながらＴＲＩＢＥたちの生きザマに共博すれば、いいのだが、残念ながら、私にはとてもこまできは・・・。

＜この馬鹿だけオチには ゴ点！＞

男はみんな巨乳への憧れと、巨根願望がある。本作の冒頭とラストのオチのつけ方を見ていると、園子温監督はそういう価値観的持ち主なら、とっい思ってしまう。女風呂に入れば、みんな裏っ裸だから、オッパイの大きさは見え見えし、男風呂に入れば男性器の大きさがとってとして丸見えだ。時々は男性器とは言えないようなものもあることもある。本作は、ＴＯＫＹＯにおけるさまざまなＴＲＩＢＥとその対決を描いているが、その対立の軸はブクロのメラと、ムサシノＳＡＲＵの海にある、三国における曹操、劉備、孫権の対立の軸は、演王前に対する「忠誠」や「右」の是無だった。また、「鼎目百年」では、「鼎目百年」は曹操亮吉と徐に乗家とのＯＫ対決が後鎖になっていくはずだ。

しかし、本作が描いたメラと海の対立軸は何？それは、本作ラストに描かれる、銭湯でのアノの大きさ争いだというから話れる。つまり、メラは目分のアノの大きさに絶対的な自信をもっており、それがＴＲＩＢＥを支配する何よりの源動力になっていたのだが、ある日銭湯で海のアノの大きさを見てアレ・・・。それまでの絶対的自信を失ったメラは以降、海への敗対心を強化するというわけだが、そのパワだけオチは一体ナニ？いくら何でも、園子温監督、そりゃエンタメ性の爆発過ぎて、おふざけが過ぎたのでは・・・？